

# Oracle Database Technology Night ～ 集え！オラクルの力(チカラ) ～

**18<sup>c</sup>** ORACLE<sup>®</sup>  
Database

## Oracle Database 18c テクノロジーシリーズ 4 「Development と Performance 関連の機能強化」 ～ Performance ～

日本オラクル株式会社  
ソリューション・エンジニアリング統括  
クラウド・インフラストラクチャー本部  
津島 浩樹／瀬瀬 貴紀

ORACLE<sup>®</sup>

- 以下の事項は、弊社の一般的な製品の方角性に関する概要を説明するものです。また、情報提供を唯一の目的とするものであり、いかなる契約にも組み込むことはできません。以下の事項は、マテリアルやコード、機能を提供することをコミットメント(確約)するものではないため、購買決定を行う際の判断材料になさらないで下さい。オラクル製品に関して記載されている機能の開発、リリースおよび時期については、弊社の裁量により決定されます。

OracleとJavaは、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。  
文中の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。

# アジェンダ

- 1 Database In-Memoryの機能拡張
- 2 MemOptimizeプール
- 3 Optimizerの機能拡張
- 4 その他の機能

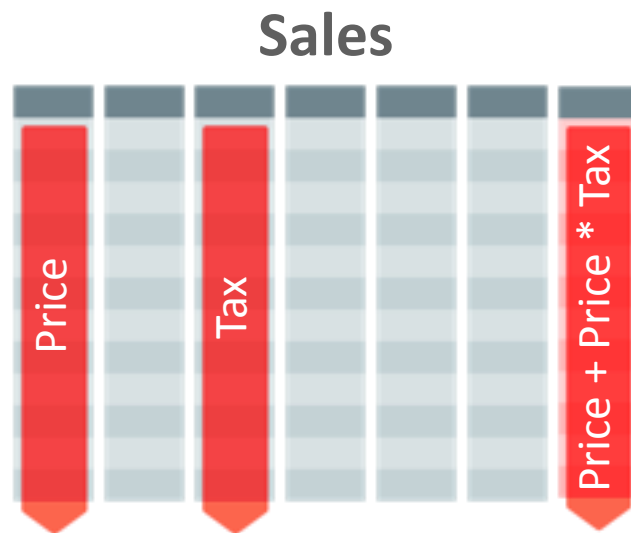
# Database In-Memoryの拡張機能

- In-Memory Expressionsの動的キャプチャ・ウィンドウ
- 自動インメモリ管理
- 外部表に対するIn-Memory
- In-Memory ダイナミック・スキャン
- In-Memoryでの算術最適化
- その他の拡張機能

# In-Memory Expressionsの動的キャプチャ・ウィンドウ

必要なエディション : EE + DBIM Option, EE-ES + DBIM Option, DBCS EE-EP, ExaCS

# In-Memory Expressions (IME) とは？



Price

Tax

それぞれをIn-Memory化して検索を高速化

しかし、PriceとTaxを用いた**演算**が必要になることも...

(例)  $Price + Price * Tax$

**12.2**で In-Memory Expressions (IME) が登場  
計算式に基づく結果を**仮想列**としてIn-Memory化  
※従来の仮想列をIn-Memory化できるようになった

計算式(仮想列)は**明示的な作成**、または  
**自動キャプチャ**された式の利用が可能

## 12.2での In-Memory Expressionsの課題

- BIツールのようにSQLが自動生成される場合はIMEの明示作成が困難
- IMEの自動キャプチャは意図した式がキャプチャされづらい
  - DB作成後全部または過去24時間がキャプチャ範囲
  - TOP20がキャプチャ対象のため、こぼれ落ちる式が存在する
  - 不要な時間帯のIMEまでキャプチャされ非効率

IMEの使いづらさを改善したい！！

# 18c In-Memory Expressionsの動的キャプチャ・ウィンドウ

- IMEの自動キャプチャ時に有用
- 自動キャプチャする範囲(ウィンドウ)を任意に定義可能
- ウィンドウ内で発生する式だけを仮想列としてIn-Memory化できる
- ワークロード間隔が分かっている場合に特に効果あり  
利用例)
  - パッケージアプリケーションの特定の機能で使われる式
  - ある特定の時期に集中して実行される分析処理





# IME動的キャプチャ・ウィンドウ 設定方法

## • 設定手順

1. 初期化パラメータ INMEMORY\_EXPRESSIONS\_USAGE をDISABLE以外の値に設定  
(その他 INMEMORY\_SIZE等でインメモリが使える設定にしておく)
2. 管理者権限でSQL\*PlusまたはSQL DeveloperにてDBにログイン
3. IME考慮範囲をユーザー指定範囲に設定 `EXEC DBMS_INMEMORY_ADMIN.IME_CAPTURE_EXPRESSIONS('WINDOW');`
  - CUMULATIVE: データベースの作成後のすべての式統計を考慮します。
  - CURRENT: 過去24時間の式統計のみを考慮します。
  - **WINDOW**: ユーザーが指定した式キャプチャウィンドウで追跡された式を仮想列として追加します。
4. ウィンドウのオープン `EXEC DBMS_INMEMORY_ADMIN.IME_OPEN_CAPTURE_WINDOW();`
5. (任意のセッション／アプリケーションにて) ワークロードの実行＝式のキャプチャ
6. ウィンドウのクローズ `EXEC DBMS_INMEMORY_ADMIN.IME_CLOSE_CAPTURE_WINDOW();`  
※ウィンドウが開いているかどうかはDBMS\_INMEMORY\_ADMIN.IME\_GET\_CAPTURE\_STATEで確認可能
7. キャプチャされた式のポピュレーション `EXEC DBMS_INMEMORY_ADMIN.IME_POPULATE_EXPRESSIONS();`

## • 確認

- `SELECT * FROM DBA_EXPRESSION_STATISTICS WHERE SNAPSHOT = 'WINDOW';` -- キャプチャされた式の確認
- `SELECT * FROM DBA_IM_EXPRESSIONS;` -- ポピュレーションされた式の確認

# IME動的キャプチャ・ウィンドウ 実行例

--\*\*\* キャプチャ設定 \*\*\*

```
SQL> EXEC DBMS_INMEMORY_ADMIN.IME_CAPTURE_EXPRESSIONS('WINDOW');
```

PL/SQL procedure successfully completed.

```
SQL> EXEC DBMS_INMEMORY_ADMIN.IME_OPEN_CAPTURE_WINDOW();
```

PL/SQL procedure successfully completed.



この間にワークロードを実行

```
SQL> EXEC DBMS_INMEMORY_ADMIN.IME_CLOSE_CAPTURE_WINDOW();
```

PL/SQL procedure successfully completed.

```
SQL> EXEC DBMS_INMEMORY_ADMIN.IME_POPULATE_EXPRESSIONS();
```

PL/SQL procedure successfully completed.

--\*\*\* ポピュレートされた式の確認 \*\*\*

```
SQL> select TABLE_NAME,SQL_EXPRESSION from dba_im_expressions where owner='TEST1';
```

TABLE_NAME	SQL_EXPRESSION
BIGEMP	ROUND("SAL"*10/52, 2)
BIGEMP	10*(NVL("COMM", 0)+"SAL")

--\*\*\* ウィンドウ状態の確認 \*\*\*

```
SQL> EXECUTE  
DBMS_INMEMORY_ADMIN.IME_GET_CAPTURE_STATE(:b_state, :b_time)
```

PL/SQL procedure successfully completed.

```
SQL> PRINT b_state b_time  
B_STATE
```

CLOSE

B\_TIME

21-MAY-18 03.37.28.218495 PM

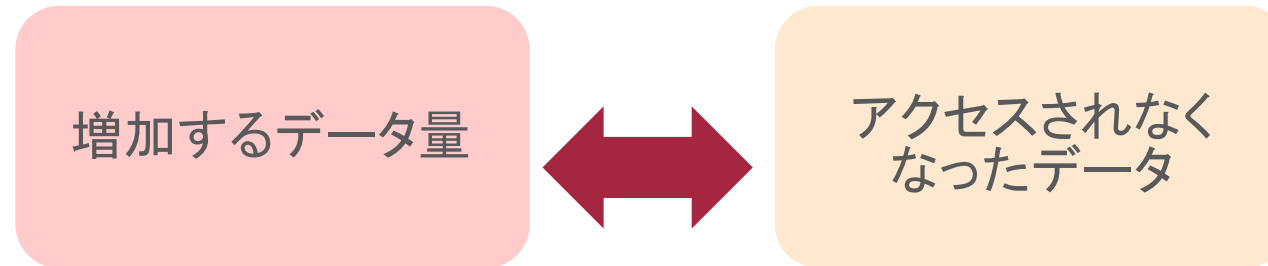
ワークロード中に実行された計算式がポピュレートされている

# 自動インメモリ管理

必要なエディション : EE-ES + DBIM Option, DBCS EE-EP, ExaCS

# これまでのインメモリ管理(～12.2)

- 12.1でのIn-Memory領域管理の不便さ



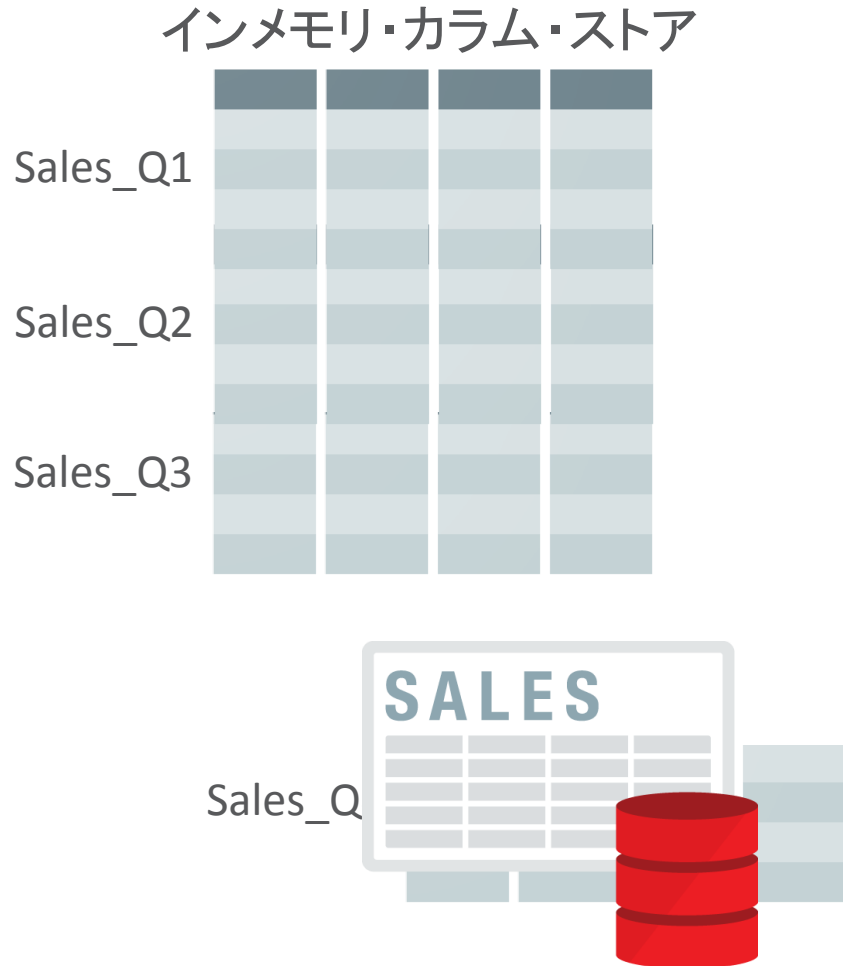
In-Memory領域を使いたい

無駄にIn-Memory領域を占有

In-Memory領域のコントロールを手動で行わなければならない

- 12.2 ADOインメモリポリシーにて自動的なインメモリ化/インメモリ退去が可能に  
ただし、下記の制約にて利用方法が煩雑
  - セグメントごとにポリシー設定が必要
  - インメモリ化／インメモリ退去のポリシーはそれぞれ個別に設定が必要
  - ポリシー評価・発動の条件(日数等)を予め決めて定義しておく必要がある

# 自動インメモリ管理(18c～)



- 初期化パラメータ:  
INMEMORY\_AUTOMATIC\_LEVEL にて制御可能
- ヒート・マップ のアクセス統計を利用し、インメモリ・テーブルおよびパーティションを自動的にランク付け
- 新しいセグメントをインメモリ化する際に、メモリ不足の場合はアクセス頻度の低いインメモリデータを自動的に除去

(利用例)

時系列でパーティション化されているテーブルの過去パーティションを除去して新規パーティションをIn-Memory化

# 自動インメモリ管理の設定

- 初期化パラメータ: INMEMORY\_AUTOMATIC\_LEVEL
  - OFF (デフォルト): 自動インメモリ管理は無効。Oracle Database 12gR2 (12.2.0.1)と同じ動作です。
  - LOW: メモリ不足の場合、IM列ストアからコールドセグメントを削除した上で新規セグメントをポピュレートします。(ただしADOインメモリポリシー条件が有効なセグメントは削除対象外)
  - MEDIUM: LOWの動作に加え、以前にメモリ不足でポピュレート未完了だったホットセグメントが先にポピュレートされるよう最適化されます。(ADOインメモリポリシーを併用している場合、コールドセグメントであっても削除されず、十分なメモリを確保できない状況が生じます。)
- インメモリPRIORITYがNONEのセグメントのみ自動削除の対象となります。
- セグメント毎の細かな制御が必要な場合、従来のADOインメモリポリシーとの併用も可能です。この場合、ADOインメモリポリシーに定義された条件が優先されます。

(参考)

自動インメモリ管理がヒートマップを評価する期間はデフォルトで31日分です。  
評価期間を変更する場合は下記のプロシージャを使います。

DBMS\_INMEMORY\_ADMIN.AIM\_SET\_PARAMETER

例) 統計ウィンドウ (AIM\_STATWINDOW\_DAYS定数) を7日間に設定する場合

```
EXEC DBMS_INMEMORY_ADMIN.AIM_SET_PARAMETER ( DBMS_INMEMORY_ADMIN.AIM_STATWINDOW_DAYS, 7 );
```

# 自動インメモリ管理 実行例

```
SQL> select segment_name,partition_name,bytes_not_populated,populate_status from v$im_segments;
```

SEGMENT_NAME	PARTITION_NAME	BYTES_NOT_POPULATED	POPULATE_STAT
NUM_PART	PARTITION03	259031040	OUT OF MEMORY
NUM_PART	PARTITION02	0	COMPLETED
NUM_PART	PARTITION01	0	COMPLETED

3つ目のパーティションがメモリ不足により全てインメモリ化できず(4つ目以降のパーティションもインメモリ化されない)

```
SQL> alter system set INMEMORY_AUTOMATIC_LEVEL=low scope=memory;
```

System altered.

```
SQL> select count(*) from num_part partition(partition04);
```

COUNT (*)
85196850

```
SQL> select segment_name,partition_name,bytes_not_populated,populate_status from v$im_segments;
```

SEGMENT_NAME	PARTITION_NAME	BYTES_NOT_POPULATED	POPULATE_STAT
NUM_PART	PARTITION04	0	COMPLETED
NUM_PART	PARTITION01	0	COMPLETED

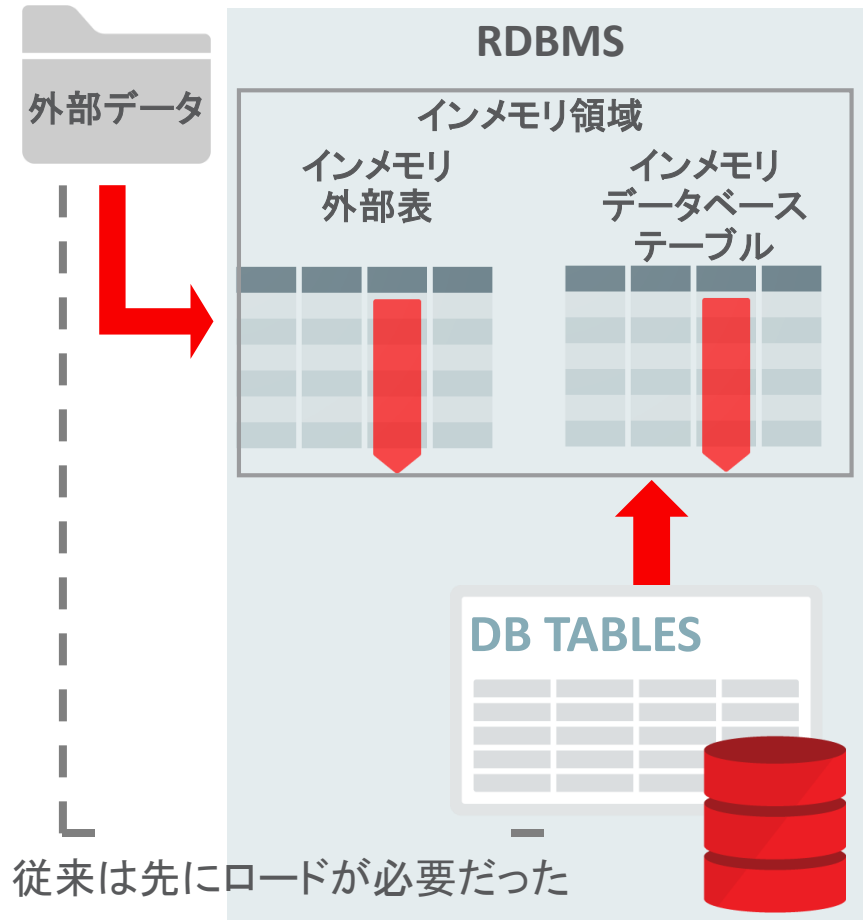
自動管理を有効にしたところ、メモリ不足とならず既存の(アクセス頻度の低い)パーティションを追い出してインメモリ化

# 外部表に対するIn-memory

必要なエディション : EE-ES (ODAを除く) + DBIM Option, DBCS EE-EP, ExaCS



# 外部表に対するIn-Memory



- 従来は外部表データを頻繁に分析に利用したいときは、一旦RDBにロードしてインメモリ化する必要がありました
  - 18cより外部表によりデータベース外のデータへの透過的なアクセスが可能となりました
  - 18cでの外部表サポート
    - ORACLE\_LOADER
    - ORACLE\_DATAPUMP
- ※ORACLE\_HDFSおよびORACLE\_HIVEは将来サポート予定

# In-Memory 外部表 利用方法

- 外部表作成時に**INMEMORY**句を指定します。
- 対象セグメントを**手動**でポピュレートします。
- インメモリの外部表を問い合わせるセッションでは、初期化パラメータ `QUERY_REWRITE_INTEGRITY` を **stale\_tolerated** に設定する必要があります。

```
SQL> CREATE TABLE TAB_IM_EXT
2  (COL1 VARCHAR2(100), COL2 VARCHAR2(100))
3  ORGANIZATION EXTERNAL
   (中略)  --通常の外部表定義と同じ
18 INMEMORY;
```

Table created.

```
SQL> select sum(COL1) SC from TAB_IM_EXT;
```

Execution Plan

Id	Operation	Name	Rows	Bytes	Cost
0	SELECT STATEMENT		1	5	
1	SORT AGGREGATE		1	5	
2	<b>EXTERNAL TABLE ACCESS FULL</b>	TAB_IM_EXT	1180	5900	

```
SQL> alter session set query_rewrite_integrity=stale_tolerated;
```

Session altered.

```
SQL> select sum(COL1) SC from TAB_IM_EXT;
```

Execution Plan

Id	Operation	Name	Rows
0	SELECT STATEMENT		1
1	SORT AGGREGATE		1
2	<b>EXTERNAL TABLE ACCESS INMEMORY FULL</b>	TAB_IM_EXT	1180

# 外部表に対するIn-Memory 制限事項

- 自動ポプュレーションおよび自動再ポプュレーションはサポートされません。  
明示的にDBMS\_INMEMORY.POPULATEまたはDBMS\_INMEMORY.REPOPULATEを使用する必要があります。
- column句、distribute句、priority句など一部のINMEMORY副次句は無効です。
- ORACLE\_LOADERおよびORACLE\_DATAPUMP アクセスドライバのみサポートされています。(ORACLE\_HDFSおよびORACLE\_HIVEは将来サポート予定)
- パーティション化、結合グループ、In-Memory Expressions、In-Memory算術最適化はサポートされません。
- パラレル実行はできません。

# In-memoryダイナミック・スキャン

必要なエディション : EE + DBIM Option, EE-ES + DBIM Option, DBCS EE-EP, ExaCS

# In-Memory ダイナミック・スキャン 概要



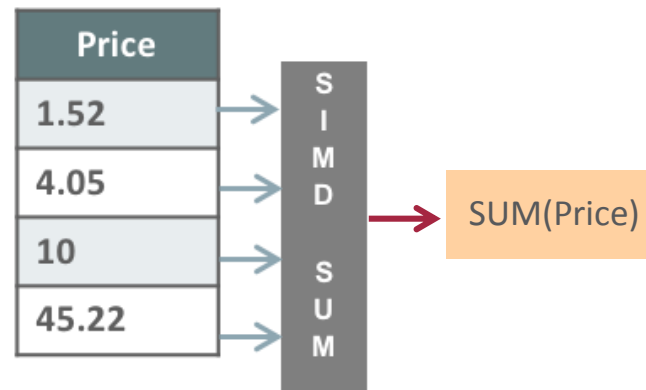
- In-Memory ダイナミック・スキャンは、軽量プロセススレッドを使用して**テーブルスキャン**を自動的かつ透過的に並列化します。
- Resource Managerが有効な場合にのみ有効になります。
- In-Memory ダイナミック・スキャンはResource Managerにより透過的に制御されるためアプリケーションの変更は必要ありません。
- アイドル状態のCPUリソースを使用してIMCUを並列にスキャンし、CPU使用率を最大化します。スキャンは動的なので、既存のワークロードに影響を与えずに余剰分のCPU帯域幅を使用できます。

# In-memoryでの算術最適化

必要なエディション : EE + DBIM Option, EE-ES + DBIM Option, DBCS EE-EP, ExaCS

# In-Memoryでの算術最適化

- **QUERY LOW**で圧縮された**NUMBER**列に対し、ハードウェアでのネイティブ計算を可能にする形式でエンコードできるようになりました。
- この機能を有効化するには初期化パラメータINMEMORY\_OPTIMIZED\_ARITHMETICをENABLEに設定します。(デフォルト: DISABLE)
- SIMDベクトル処理により、単純な集約、GROUP BY集約、および算術演算の高速化が期待できます。
- すべての処理で最適化形式が利用できるわけではないため、IM列ストアには従来のNUMBERデータ型と最適化型の両方が格納されます。(約15%~20%程度のオーバーヘッド)



# Database In-Memoryの拡張機能

## その他の拡張機能

- 結合グループの拡張
  - 結合グループ(12.2から)
    - 結合でもディレクトリ圧縮(圧縮した状態での処理)が可能
  - 自己結合(単一系列の結合グループ)をサポート
    - INMEMORY JOIN GROUP <結合グループ> (<表名> (<列名>))
- LOBのパフォーマンス向上
  - インラインLOBに対してSIMDベクター処理が可能
- Exadataフラッシュ・キャッシュのIn-Memoryサポート
  - 非圧縮表とOLTP圧縮表をサポート(12.2はHCCのみ)
    - ALTER TABLE <表名> [NO] CELLMEMORY [<インメモリ圧縮>]
    - CAPACITY LOW がデフォルト



# アジェンダ

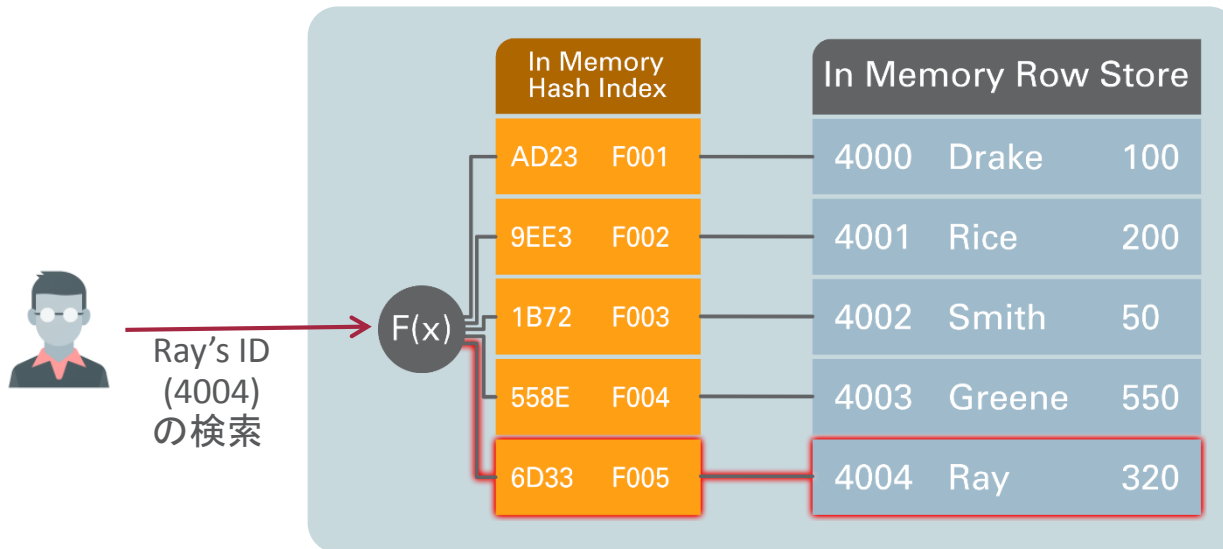
- 1 Database In-Memoryの機能拡張
- 2 MemOptimizeプール
- 3 Optimizerの機能拡張
- 4 その他の機能

# MemOptimizeプール

必要なエディション : EE-ES (Exadataのみ), DBCS EE-EP, ExaCS

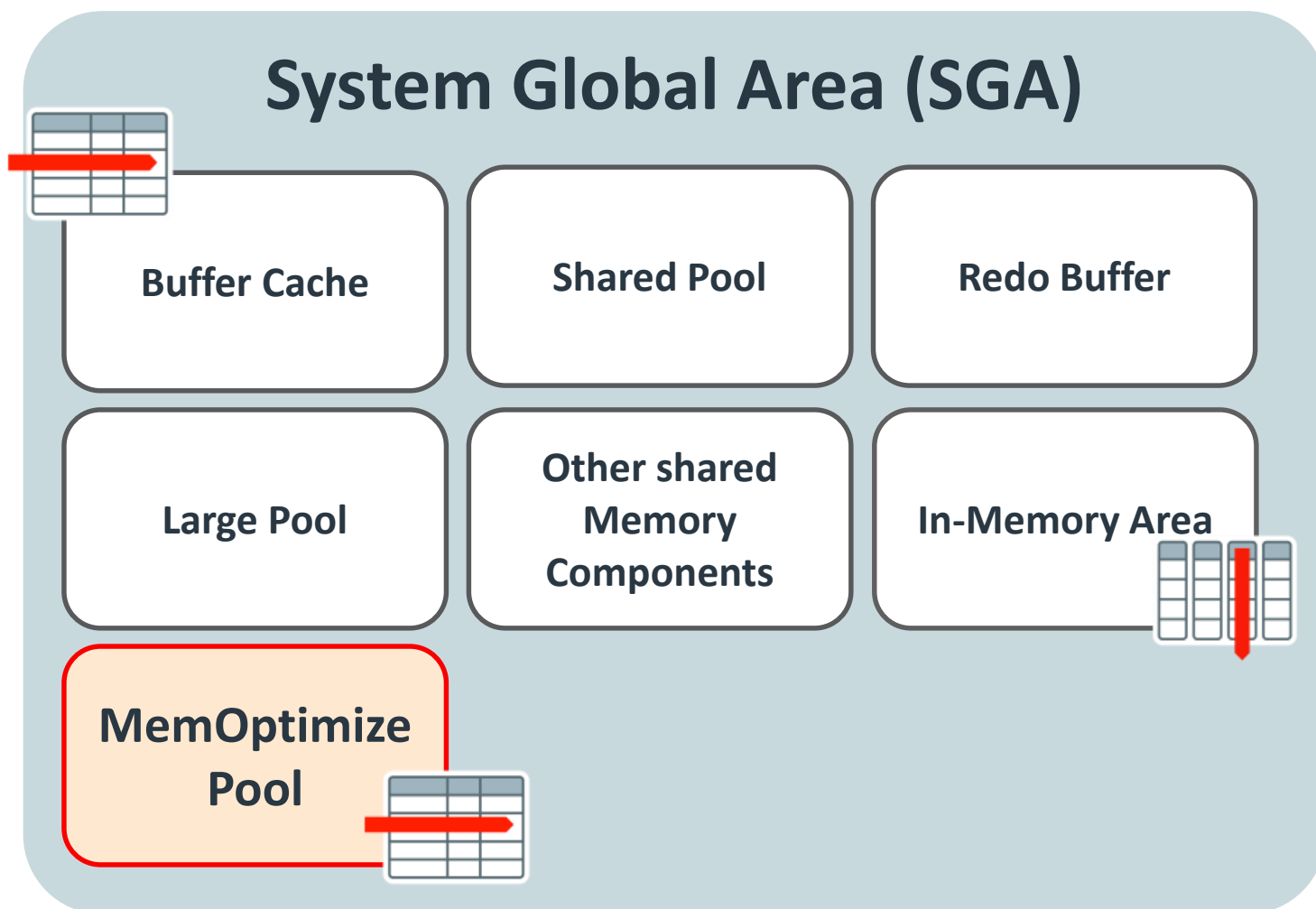
# MemOptimizeプール

例：Raysのリード



- 超高速な主キー・ベースの検索
  - ハッシュ関数を使用した行アクセス
    - 新たなインメモリ・ハッシュ索引を利用
    - 単一表ハッシュ・クラスタより高速
      - ブロック数が増える(全表スキャンが遅い)などがない
- 新しい低レイテンシ・クライアント・プロトコルによるダイレクト・アクセス
  - 12.2からのExadirectプロトコル
    - RDMA(Remote Direct Memory Access)を使用
- パフォーマンス上のメリット:
  - 主キー・ベースの検索に比べ、**最大 x4 のスループット増**
  - **レスポンス・タイムは最大 50% 減**

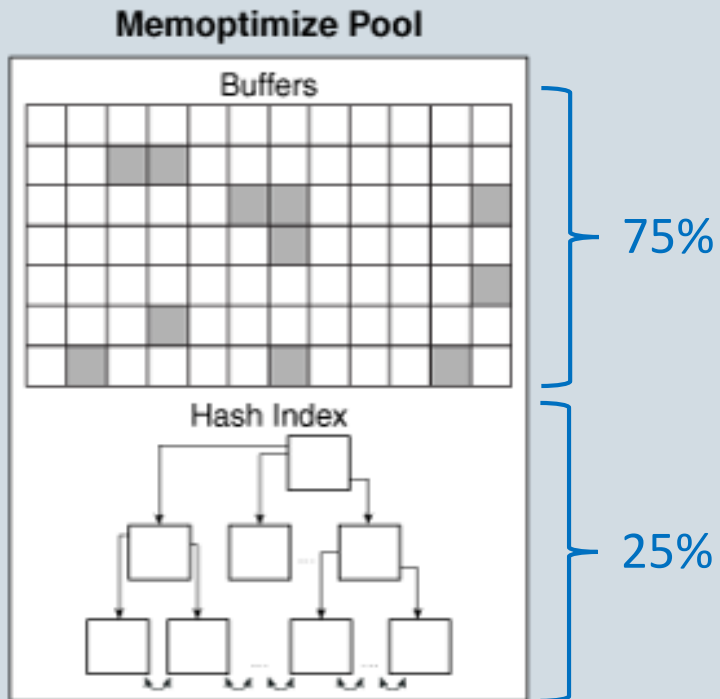
# MemOptimize行ストアの基本構成



- SGA内の新たな領域としてMemOptimizeプールを追加
- MEMOPTIMIZE\_POOL\_SIZEパラメータによりサイズ設定
  - 最小値は100Mバイト
- SGA\_TARGETも十分に大きな値の設定が必要
- インメモリ領域と同じように静的プールとして確保
  - 自動メモリー管理されない

# MemOptimizeプール領域: 構成

## MemOptimizeプール



- 2つのパートで構成:
  - バッファ領域: 75%
    - DBバッファ・キャッシュ内のバッファと同じ構造
  - ハッシュ索引: 25%
    - 複数の非連続メモリー単位としてハッシュ索引を割り当てる
    - 各単位には、複数のハッシュ・バケットを使用し、個別のマップ構造によりメモリー単位と主キーを関連付けられる

# MemOptimizeプールの導入

## 1. 初期化パラメータを設定

- `alter system set MEMOPTIMIZE_POOL_SIZE=<サイズ> scope=spfile;`

## 2. データベースの再起動

- 領域はV\$SGAでは確認できない(show parameterで確認)

## 3. 格納するデータに対し属性を追加

- `alter table <テーブル名> MEMOPTIMIZE FOR READ ;`
  - パーティションは指定できない
  - `USER_TABLES.MEMOPTIMIZE_READ`などで確認('enabled'/'disabled')
- DISABLEにするときには'NO MEMOPTIMIZE FOR READ'を指定

## 4. プールにポピュレートする

- `exec DBMS_MEMOPTIMIZE.POPULATE('<スキーマ名>', '<表名>', ['<パーティション名>']);`
  - これが確認できない(領域不足でもエラーにならない)
- 削除は`DBMS_MEMOPTIMIZE.DROP_OBJECT`プロシージャ

# MemOptimizeプール

## 主要統計名 (v\$sysstat/v\$mystat)

### 統計の確認方法) v\$sysstat/v\$mystatビューとv\$statnameで確認する

確認SQL例)

```
select display_name, value from v$mystat m, v$statname n
where m.STATISTIC#=n.STATISTIC# and display_name like 'memopt r%'
order by 1;
```

統計名	説明
memopt r lookup	ハッシュ索引での合計参照数
memopt r hits	ハッシュ索引での合計ヒット数
memopt r misses	ハッシュ索引での合計ミス数(見つからなかった数)
memopt r rows populated	ポピュレートした行数
memopt r blocks populated	ポピュレートしたブロック数
...	

# MemOptimizeプール

## メモリ・ハッシュ索引アクセス(主キーに対する等価条件検索)

```
SQL> alter table tab01 memoptimize for read;
```

...

```
SQL> select * from tab01 where col1=1000;
```

Id	Operation	Name	Rows	Bytes	Cost (%CPU)	Time
0	SELECT STATEMENT		1	121	2 (0)	00:00:01
1	TABLE ACCESS BY INDEX ROWID <b>READ OPTIM</b>	TAB01	1	121	2 (0)	00:00:01
* 2	INDEX UNIQUE SCAN <b>READ OPTIM</b>	TAB01_PK	1		1 (0)	00:00:01

## ※ ポピュレートされないときでもこの実行計画になる('memopt r hits'を確認する)

```
SQL> select display_name,value from v$mystat m,v$statname n
2   where m.STATISTIC#=n.STATISTIC#
3   and display_name in ('memopt r lookups','memopt r hits','memopt r misses');
```

DISPLAY_NAME	VALUE
memopt r lookups	1
<b>memopt r hits</b>	<b>1</b>
memopt r misses	0



# MemOptimizeプール

## メモリ・ハッシュ索引を使用しない例

```
SQL> select * from tab01 where col1 BETWEEN 100 AND 200;
```

Id	Operation	Name
0	SELECT STATEMENT	
1	TABLE ACCESS BY INDEX ROWID BATCHED	TAB01
* 2	INDEX RANGE SCAN	TAB01_PK

Predicate Information (identified by operation id):

2 - access("COL1">=100 AND "COL1"<=200)

```
SQL> select * from tab01 where col1 IN (100,200);
```

Id	Operation	Name
0	SELECT STATEMENT	
1	INLIT ITERATOR	TAB01
2	TABLE ACCESS BY INDEX ROWID	TAB01
* 3	INDEX UNIQUE SCAN	TAB01_PK

Predicate Information (identified by operation id):

3 - access("COL1"=100 OR "COL1"=200)

```
SQL> select * from tab01 where col1=100 AND col2=200;
```

Id	Operation	Name
0	SELECT STATEMENT	
* 1	TABLE ACCESS BY INDEX ROWID	TAB01
* 2	INDEX RANGE SCAN	TAB01_PK

Predicate Information (identified by operation id):

1 - filter("COL2"=200)  
2 - access("COL1"=100)

# MemOptimizeプール キャッシュ・ミスになる場合

- memopt r missesがアップする場合
  - ポピュレートしていない表
  - drop\_objectを行った表
  - すべてポピュレートされていない表のデータ (MemOptimizeプールに入り切らないデータ)
  - ポピュレートしていないパーティションへのアクセス
  - ポピュレートしていないインスタンスでのアクセス
  - 更新された行へのアクセス
    - consistent getsがアップする

```
SQL> alter table tab01 memoptimize for read;
```

```
SQL> select * from tab01 where col1=1000;
```

-----		
Id	Operation	Name
-----		
0	SELECT STATEMENT	
1	TABLE ACCESS BY INDEX ROWID <b>READ OPTIM</b>	TAB01
* 2	INDEX UNIQUE SCAN <b>READ OPTIM</b>	TAB01_PK
-----		

```
SQL> select display_name,value from v$mystat m,v$statname n
2      where m.STATISTIC#=n.STATISTIC#
3          and display_name in ('memopt r lookups',
4                                'memopt r hits',
5                                'memopt r misses');
```

DISPLAY_NAME	VALUE
-----	
memopt r lookups	1
memopt r hits	0
<b>memopt r misses</b>	<b>1</b>

# MemOptimizeプール

## ポピュレーションの監視

- ポピュレーションの統計が更新しなくなるのをチェック
  - ポピュレーションするセグメントの行数がカウントアップされたのを確認

```
SQL> select display_name,value from v$sysstat m,v$statname n
2      where m.STATISTIC#=n.STATISTIC#
3          and display_name in ('memopt r rows populated',
4                               'memopt r blocks populated');
```

DISPLAY_NAME	VALUE
memopt r rows populated	312613
memopt r blocks populated	44659

# MemOptimizeプールの制限

- ヒープ表(通常の表)のみ使用可

```
alter table iot_01 memoptimize for read;
```

\*

ERROR at line 1:

ORA-62148: MEMOPTIMIZE FOR READ feature cannot be enabled on IOTs.

- 圧縮表には使用できない

```
alter table tab_01 memoptimize for read;
```

\*

ERROR at line 1:

ORA-62141: MEMOPTIMIZE FOR READ feature cannot be used with COMPRESS option.

- 主キー制約が必須

– ローカル索引の主キーは使用できない

※ RAC環境でのデータ分散は行われない

# アジェンダ

- 1 Database In-Memoryの機能拡張
- 2 MemOptimizeプール
- 3 **Optimizerの機能拡張**
- 4 その他の機能

# Optimizerの拡張機能

- 近似Top-N問合せ (Developmentを参照)
- パフォーマンス・フィードバック
- Oracle Database Standard Edition(SE)のプラン・スタビリティ
- パーティション・ウィズ操作の強化
- Autonomous Databaseのオプティマイザ

# Optimizerの拡張機能

## パフォーマンス・フィードバック

- パフォーマンス・フィードバックは“自動DoP”と連携する最適機能
  - 問合せの実行時間に基づいて選択した並列度を調整する
    - 収集した統計 (CPU Timeなど) を使用してパラレル度を改善 (自動再最適化)
- Oracle Database 12cR2
  - optimizer\_adaptive\_statisticsによって制御される
- Oracle Database 18c
  - parallel\_degree\_policy=adaptiveのみで有効
  - optimizer\_adaptive\_statisticsを使用して制御されなくなった
    - オーバーヘッドが大きい

# Optimizerの拡張機能

Oracle Database SEのプラン・スタビリティ(ストアド・アウトライン)

- SQL実行計画を制御するためにSEで使用されることが多い
- Oracle Database 11gR1で非推奨
  - Oracle Database 18cでも引き続き機能する



# Optimizerの拡張機能

Oracle Database SEのプラン・スタビリティ(SPMのサブセット)

- これまではSPM(SQL計画管理)はEEのみの機能
- Oracle Database 18cからSEにSPM機能のサブセットが可能に
  - ストアド・アウトラインと同様の機能
  - 複数から最適な実行計画を使用することはできない
    - 安定化するだけ(実行計画を変化させない)
- ストアド・アウトラインからSQL計画ベースラインへの移行は簡単
  - `DBMS_SPM.MIGRATE_STORED_OUTLINE(attribute_name => 'all' )`
- ストアド・アウトラインではなくSPMを使用した計画の管理...

# Optimizerの拡張機能

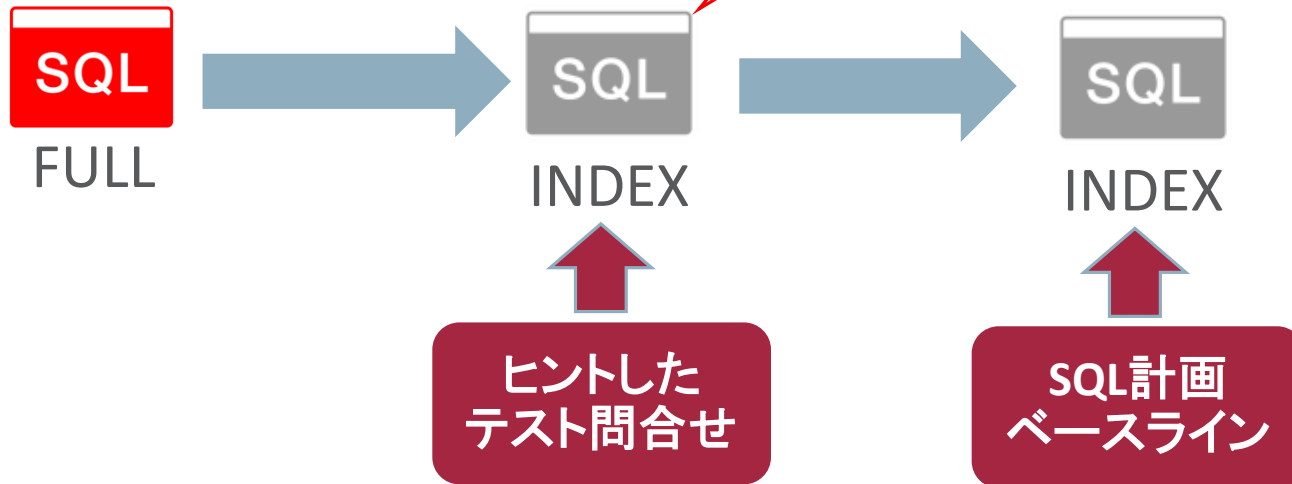
SEのSPM使用例(もうストアド・アウトラインは必要ない)

```
SELECT SUM(value)
FROM   sales
WHERE  region_id=:1
```

```
SELECT /*+ INDEX(s ix_sales) */ SUM(value)
FROM   sales s WHERE region_id=:1
```

より良い計画が  
ヒントされている











計画が**完全に**  
制限される



# Optimizerの拡張機能

SEにおけるSPMのサブセット(機能はストアド・アウトラインと似ている)

1つのSQL文で1つのSQL計画ベースラインのみ許可され、SQL計画の展開は無効

	Standard Edition	Enterprise Edition
SQL文に対する複数のSQL計画ベースライン		
計画の展開(Evolution)		
自動取得		
SQLチューニング・セットからの取得		
カーソル・キャッシュからの取得		
AWRからの取得(12.2から)		
未使用SQL計画ベースラインの自動削除		
Export/Import (pack/unpack)		
ストアド・アウトラインからSQL計画ベースラインに変換		

# Optimizerの拡張機能

## パーティション・ワイズ操作の強化

- パラレル実行でのパーティション・ワイズ分析関数(ウィンドウ関数)が可能に
  - TEMP領域の削減にも効果(「津島博士のパフォーマンス講座」**第45回**)
    - 12.1まで(結合、Group By)、DISTINCT(12.2から)
  - ヒント(USE\_PARTITION\_WISE\_WIF / NO\_USE\_PARTITION\_WISE\_WIF)

```
SQL> select /*+ parallel(2) */ tab1.*, row_number() over (partition by c3 order by null) from tab1;
```

実行計画(12.2)

Id	Operation	Name
0	SELECT STATEMENT	
1	PX COORDINATOR	
2	PX SEND QC (RANDOM)	:TQ10001
3	<b>WINDOW SORT</b>	
4	PX RECEIVE	
5	PX SEND HASH	:TQ10000
6	PX BLOCK ITERATOR	
7	TABLE ACCESS FULL	TAB02

実行計画(18c)

Id	Operation	Name	Pstart	Pstop	TQ	IN-OUT	PQ Distrib
0	SELECT STATEMENT						
1	PX COORDINATOR						
2	PX SEND QC (RANDOM)	:TQ10000			Q1,00	P->S	QC (RAND)
3	PX PARTITION RANGE ALL		1	4	Q1,00	PCWC	
4	<b>WINDOW SORT</b>				Q1,00	PCWP	
5	TABLE ACCESS FULL	TAB1	1	4	Q1,00	PCWP	
1	4	Q1,00	PCWC				
1	4	Q1,00	PCWP				

# Optimizerの拡張機能

## Autonomous Databaseのオプティマイザ

- オンライン・オプティマイザ統計収集の強化
  - 従来型DML操作以外はオンライン統計収集
    - 非Autonomous: 表が空の場合のバルク・ロードのみを12cR1からサポート
- Statistics-Based Query Transformation
  - オプティマイザ統計を使用した問合せに変換(ビュー名: VW\_SQT\_XXXX)
    - MIN, MAX, COUNT, APPROXIMATE\_COUNT\_DISTINCT
- パラレル度(DOP)と同時実行
  - コンシューマ・グループ(HIGH, MEDIUM, LOW)によって自動調整
    - PARALLEL\_DEGREE\_POLICY=AUTO (LOWはシリアル実行のみ)
    - パラレルDMLもデフォルトで有効
  - PARALLELヒントによる設定
    - OPTIMIZER\_IGNORE\_PARALLEL\_HINTS=TRUE (デフォルト無視)
    - OPTIMIZER\_IGNORE\_HINTS=TRUE (その他のヒントもデフォルト無視)

# アジェンダ

- 1 Database In-Memoryの機能拡張
- 2 MemOptimizeプール
- 3 Optimizerの機能拡張
- 4 その他の機能

# その他の機能

## 新しいSQLチューニング・セットのパッケージ

- SQLチューニング・セット（SQL文のセットや実行コンテキストなど）の目的
  - SQLチューニング・アドバイザ、SQLアクセス・アドバイザ、SQLパフォーマンス・アナライザなどの入力
  - データベース間でのSQLの移行（別データベースで診断やチューニングを実施）
- これまでのDBMS\_SQLTUNEパッケージ
  - Oracle Tuning Packが必要
- 新しいDBMS\_SQLSETパッケージ
  - Oracle Tuning Packが必要ない
  - DBMS\_SQLTUNEと同等のサブプログラムを提供

# その他の機能

Exadataに対応したSQLチューニング・アドバイザー

- Exadata対応のSQLプロファイル
  - システム統計の補正
    - 失効している場合や収集するとパフォーマンスが向上する場合
    - システム統計のI/O性能(スマート・スキャンのコスト)
      - I/Oシーク時間(ioseektim)、マルチブロック・リード・カウント(mbrc)、I/O転送速度(iotfrspeed)
- システム統計(CPU性能、I/O性能)
  - Exadataでは固有のシステム統計を取得する
    - DBMS\_STATS.GATHER\_SYSTEM\_STATS('EXADATA');



# リファレンス

マニュアル・ドキュメント、連載

- Oracle Database In-Memoryガイド, 18c  
[https://docs.oracle.com/cd/E96517\\_01/inmem/index.html](https://docs.oracle.com/cd/E96517_01/inmem/index.html)
- Oracle Databaseパフォーマンス・チューニング・ガイド, 18c  
[https://docs.oracle.com/cd/E96517\\_01/tgdba/index.html](https://docs.oracle.com/cd/E96517_01/tgdba/index.html)
- Oracle Database SQLチューニング・ガイド, 18c  
[https://docs.oracle.com/cd/E96517\\_01/tgsql/index.html](https://docs.oracle.com/cd/E96517_01/tgsql/index.html)
- 津島博士のパフォーマンス講座  
<http://www.oracle.com/technetwork/jp/database/articles/tsushima/>

# テック・ナイトアーカイブ資料と お役立ち情報

## 各回テック・ナイトセッション資料 ダウンロードサイト

oracle technight



技術コラム しば  
ちよう先生の  
試して納得！  
DBAへの道



技術コラム 津島  
博士の  
パフォーマンス  
講座



もしも  
みなみんなが  
DBをクラウドで  
動かしてみたら

# Bring Your Own License

既存のオラクル・ライセンスを  
柔軟にクラウド環境で活用



## 300ドル分の無料トライアルでOracle Cloudを体験!



[https://cloud.oracle.com/ja\\_JP/tryit](https://cloud.oracle.com/ja_JP/tryit)

Oracle Cloudでは各種クラウドサービスを300ドル分無料でお試しいただけるトライアルサービスをご提供しております。無料トライアルのお申込み方法の詳細は、左のQRコード、またはURLにアクセスしてください。

Oracle Cloudのユースケース、導入事例、資料、価格などの詳細情報は、下記URLにアクセスしてください。

<http://www.oracle.com/jp/cloud/platform/overview/index.html>

～ みなさまの投稿をお待ちしております ～



Twitter

***#OracleTechNight***

こんな時、かけこむ会社が増えています。



ビジネスプロセスを  
改善したい!



今のシステムは  
使いにくい!



システムコストを  
下げたい!



パフォーマンスを  
良くしたい!



経営分析を  
したいのだが...



どんなソリューションが  
あるの?



見積りはどれくらい  
なんだろう?



楽に管理を  
したい!

Oracle Digitalは、オラクル製品の導入をご検討いただく際の総合窓口。  
電話とインターネットによるダイレクトなコミュニケーションで、どんなお問い合わせにもすばやく対応します。  
もちろん、無償。どんなことでも、ご相談ください。



お問い合わせは電話またはWebフォーム

☎ 0120-155-096

受付時間 月～金 9:00-12:00 / 13:00-17:00  
(祝日および年末年始休業日を除きます)

<http://www.oracle.com/jp/contact-us>

# Integrated Cloud

## Applications & Platform Services

ORACLE®